

問題 一

問一 ア 微妙 イ 迫(る) ウ 若干 エ 一端

問二 日本語という言葉を書き表すために、漢字、ひらがな、カタカナの三種類の文字があるのではなく、三種の文字がそれにふさわしい意味、表現、文体をもち、その集合体として日本語が成立していると筆者は考えるから。

問三 〈サクラ〉という日本語は、抽象的で遠景的な東アジア的スケールを備え、漢語的な文脈を浮き上がらせる「桜」と、和歌とともに育てられた、具象的で近景的な日本人の日常的美学を生み育てる「さくら」と、学術的、生物学的に種を表現した「サクラ」によって成り立つという意味。

問四 「春海」という漢字語圏共通の言葉に、カタカナ「ノ」を挟みこんで「春ノ海」とすることで、日本語のひらがなの言葉に翻訳され、「はるのうみ」という読み方が可能になるというような仕方、日本語の文を作っていくという役割。

問五 中国から伝来した漢字は、書くことによって、その漢字に相当する日本語がさまざまに連想され、その試行錯誤を通じて、漢字、ひらがな、カタカナから成る日本語が作られて、日本語を書記可能なものとして支えていったということ。

問題 二

問一 でも私

問二 僕の腕にしがみついていた時に老女が感じていたであろう生の充実が、僕の腕を離すことで失われたこと。

問三 僕のことを、守るべき息子や父と思い込んでしがみついていた老女が、痕跡だけを抜け殻のように残して離れていったことで、喪失感を抱いている。

問四 イ 老女の、僕にしがみついて一人でお茶も飲めないでいる様子が、赤ん坊の、疑いを知らず、ただ無防備に体を預け、安心して差し出されるものを受け止めようとひたすら唇をすぼめる様子を連想させた

ウ 彼女が虫博物館で、砂漠のハエのために自分の目を差し出しても構わないと言ったように、道に迷い自分が誰なのかもわからない老女のために、自分の右腕を差し出しても構わないという考えになった

エ 瑞々しい黒い瞳を持っている

問題 三

問一 ア いちずに男を恋い慕っている心

イ なまじつか恋に死なないならば

ウ そうはいつでもやはりしみじみと心打たれたのだろうか

エ なっただろうに

問二 情趣を解する女として意図的に描かれるはずが、歌もあまり詠めず、相手の歌の内容も理解できないような田舎の女として描かれている。

問三 陸奥の国の女が人並みであるなら一緒に都に連れて帰るだろうが、実際には情趣を解する心はないので一人で帰るということ。

問四 男が詠んだ歌から女は都に連れて行ってもらえると思いつき、歌の素養に乏しいまま男の真意を誤解してしまったから。

問五 田舎人の大したことのないことも趣があるように書き、古い歌に合致するものがある時はその歌を詠んだことにしたと考えている。

問題 四

問一 五言律詩

問二 ③

問三 いかんすべき

問四 おそらく酔う方がよいだろう

問五 かつての若さはなく老い衰えた今の私には喜びや楽しみは少なく、何を見ても心揺さぶられ涙もろくなるが、そのような心を試しに楽隊を招き音楽で慰めよう。